

【口語詩句賞】

口語詩句賞新人賞の郡司和斗さんの作品は、詩的飛躍が成立するぎりぎりの瀬戸際をつねにあざやかに更新する。詩の可能性を信じさせてくれる唯一無二の作者です。「鯨の口の中は／きれいな時間割だから／五分前行動の子供たちと／千年を老けてゆく」では、クジラの歯の整列と教育管理下の子どもたちとが重ねられ、巨大な命と社会システムの寿命を哀切な雄大さで語る。

優秀賞の奥村俊哉さんの作品は、日常と地続きの言葉がどれほど豊かであるかをいまいちど思い出せる力がある。「手の／はなびらを／風の中に／もどす」。いちど手のひらの感触を知った花びらはもうもとには戻れない。風の中をふたたび飛びながら花びらは切なく感覚しているのです。

橋田純寧さんの作品は、悲しいけれどきらきらしい。呼びかける文体の声は宛先がないゆえに途方もなく拡散してゆきます。「向かいあう／矢印たちのまんなかの／空洞こそが／愛なのですよ。」。互いを思い合う心、傷つけ合う心、求め合う心。そのどれもが愛の本質ではない。その果てにある諦めにもため息にも似た空洞にこそ愛の可能性が宿るのかもしれません。

奨励賞の江藤裕子さんの作品は、俳句の形を取りながらその伝統美をときに軽やかに、ときに挑発的に乗り越えていこうとする存在感が感じられます。「洞

窟の壁画は秋の願い事」。人や動物の営み、自然の巡りや社会。すべて失われたときには人の情熱は強烈に創作へ向かう。歴史をまなざすのはとても不確かな行為だと思う。

桜伸太郎さんの作品は、結語へ向かって個性が加速してゆく心地よい疾走感があります。「ホルンの曲線／ぼくは立ち上がる」。うずくまるようなホルンのフルームと立ち上がるぼく。立ち上がらなければ一生美しい楽器のままだ。

豊富瑞歩さんの作品は、ひりひりした自意識を見据えた先にある自己と他者の断絶に問いを投げかける。「お茶碗をやさしく持ちあげる影が／やさしく持ちあがる／夜だから」。お茶碗を持ちあげる力と、影がもちあがる力。夜は夜としか呼びようのないたつたひとつの力に収斂してゆくのでしょうか。

中矢温さんの作品は、とどめようのない歳月の流れのなかで、せめて今を享樂しようとする刹那的な愛嬌が魅力です。「実家、窓、アジフライ、／という夢日記」。人生も、家族も、ひとときの夢物語として終わらせたって構わない。

永山愛望さんの作品は、現実の、架空の動物の姿を依り代としながら、時空間を駆け巡るみずみずしい感覚がひかります。「とかげのしつぽ／ほしい／わたしがいなくなつたら／かわりに／てをふつといてほしい」。取り外し可能な私がいたなら、別れの悲しみはもつとすずしさを帯びるはず。

山本巧さんの作品は、「あのね」「たとえば」「とりあえず」と、喋り言葉独特

の呼吸が軽やかにかつ緻密に織り込まれる。「いわば今日は画鋲みたいな暮の春」。春の終わりをそこに留め置く一点として、画鋲のあたまがきらめきます。吉沢美香さんの作品は、俳句の型と短歌の抒情を融合させたようなハイブリッドなインパクトがある。「春眠の階段を折りたたむ」。隠喻の技法を効果的に使いつながら、階段はじぐざくと眠りの襞を深めながら誘いこみます。